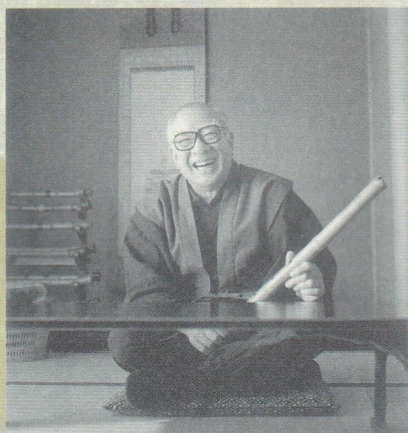


ご隠居天国

和田亮介



本紙掲載のエッセイは、二〇二四年六月から二〇一九年八月まで『山陰経済ウィークリー』（山陰中央新報社刊）に月一回掲載された「ご隠居天国」全六十一編から選びました。挿絵もすべて筆者によるものです。

三味線



「趣味は？」と聞かれて、「清元と尺八」と答えると、たいていの人達の顔に怪訝な表情が浮かぶ。

子供の頃から吹いていた尺八は別として、他にかじったものを加えると、小唄、萩江、長唄と、なんとも気の多いことだが、それにしてもみな古い邦楽で、いわゆるバタ臭いものはない。

たまにマイクを握っても、せいぜい流行を過ぎた流行歌が関の山、口の悪い奴に言わせると、まるで長唄みたいな発声だと笑う。

かかる時代離れた趣味に偏った理由は、私の少年期にあった。

育ったのは、今では松江市に併合されているが島根県は宍道町で、人口1万人足らずの古い宿場町、父の代で14代というから、出雲地方でもかなり古い家に育った。

私の幼時、わが家は「永楽座」という芝居小屋をもっていた。当時の娯楽といえば、まだ映画も珍しい頃だから、月2、3度まわってくる田舎芝居が唯一の楽しみであった。

芝居のかかるたび、母や祖母に連れられて木戸をくぐったものだが、

小屋主のために敷かれた毛氈の、母の膝が定席だった。

今でも、敷物の緋の色や、折詰料理、煙草盆、小屋の便所のすえた臭いなど、幼い時の思い出は多いが、なんといつても耳に残るのは、舞台の下座で鳴る三味線の音だった。

もつとも、地方巡業の下座のこと、名手、妙手が弾くわけではなかったが、半分破れて垂れ下がった御簾うちで鳴る三味線の哀しい音色が、芝居と重なって今でも頭の中にある。以来、私の感覚の世界、特に「音」の世界は、あの三筋の絹の音色で占められた。

今から半世紀も前になるが、赤坂のある料亭で、小柄で品のよい仲居さんに会った。名前はおテルさん、「私、明治35年の生れよ」と言う。勘定すると75歳、とてもそんな歳には見えない。

私が清元を稽古していると知ると、彼女、途端に表情が変わって、「『三千歳』だったらなんとか弾けるから、ぜひ語って頂戴……」

三味線を抱えて現れたおテルさん、別人のようなひと撥を入れた。

「冴えかえる 春の寒さに降る雨も……」

その鮮やかな音締めは、ただ者とは思えない。やがて語り終わった私は、彼女に低頭した。

「『三千歳』なんて久しぶり。ほんと嬉しかったわ。近頃の若い人、だんだん芸がおろそかになって……」

「芸者から芸をとったら何も残らない、もつと苦労して……。もつとも、苦労して磨いても、それを分かってくれるお客がいなのだから、辛いだけ損かもしれないわね。昔の稽古は苦しいごんしたよ。それこそ死んじゃおうか、と思うほど……」

「反面、うちの師匠、とても優しいところがあつた。若い頃、とつてもお金に苦労して、お月謝にも不自由したことがあつたの。すると師匠、火鉢のかけで、月謝袋の中からお金を抜き出し、これは取つときな。袋だけありがたくもらつとく……」

愛しむように、膝の三味線を撫で、遠く昔に目を移したおテルさんの横顔が、私にはとても美しいものに見えたのだった。

(2014年9月9日号)

脚で思う

この頃は自分の性格に悩み、周囲も自分を受け入れてはくれないと、気に病む若者が多いと聞く。いろんな人間がいて、それぞれの良さがあ
るのだから、一番良いところをそれなりに伸ばせばよいのに、そうは考
えられなくなっている。

個性個性と言いながら、周囲が必ずしもそれを時間かけて育もうとはしていないこと、型にはめない教育と主張するわりに「規格外」に不寛容な社会全体の風潮が、若者に自信喪失させ、閉塞感を与えているのかもしれない。



若者は、私などにはまったくもってチンプンカンプンなパソコンやスマホなるものを指先で自在に操り、あつぱれ、さまざまな情報を巧みに取り込む。

だが、個性追求に逸る気持ちと、自分の存在価値に不安を抱くまま、外からデータばかり集めていては、内側がパンパンに腫れあがり、病んでしまっても不思議はない。

この頃は秋になっても浮かぬ顔、年中、慢性「五月病」の表情に出会うような気がする。

船場には昔から「手で考え、脚で思う」という言葉がある。人間にはじつとして動かす手もあれば、戸外へと踏み出す脚もある。

忘れもしない、昭和36年「ごどもの日」、30歳になったばかりの私は、養子先である和田哲に3代目として入社した。その「船場大学」初日のことである。

「まあ、今日は初日。氣い張らんと、ゆつくりやんなはれ」

社長である義祖父にそう言われ、部屋を見渡した私。

「ところで、私の机……」

「机？机なんぞはおまへんで。疲れたんやったら、どこぞ空いているところへ掛けはったらよろし」

何が印象深いといって、オマエの机はないと宣言された時ほどの鮮烈さはない。曲がりなりにも3代目、そこそこマシな机を用意してくれているはず、と思っていただけに、まったくもって言いようのない不安を覚えたものである。

ところが、彼はしらつと言った。「船場はナ、アンタがおった東レのように、電話一本で何億という商売ができる場所は違います。顔を売って、脚で稼ぐのがここでの商いや。そやそや、ここにアンタのために名刺作っておいた。これでせいぜい「その顔」売ることンナ」

社名と私の名が刷り込んであるその名刺、問題はサイズの「陣笠」と呼ばれる並外れた大きさの名刺をもって顔を売れ、というのである。机をもてぬ私は、さっそく唯一の仕入れ先である東洋紡を訪ねた。

当時「天下の東洋紡」と知られていたが、そこで勧められた椅子がゴミ箱兼用だったのには驚かされた。しかし、それ以上に、各担当者のこちらを眺める顔に共通の表情が表れたことに、身のすくむ思いだった。（この男か、噂の3代目。さぞかし苦労することやろ）

くだんの名刺を差し出した時の表

情も、また同じだった。

（えらいまた、大きな……）

脇の下を冷や汗が流れた。帰って一部始終を報告する私に、ジイさんは真顔で言った。

「笑われた？よろしやないか。名刺入れにまともに入らんことぐらいは分かつとる。1枚だけ飛び出しとるはずや。次に名刺入れを開いた時、これ何やいな……ああ、和田哲の3代目！」

大きさへの驚きと笑い、2度見てもらえる、私の顔と名前は確実に印象付けられる、という読みが彼にはあった。

「人のせんこと。この船場で生き抜くには、他人のしないことをする以外に道はおへん」

東洋紡の人たちに最初に表れた表情は、船場の中でも殊にユニークである彼の日常を熟知することによる、私への同情だった。

確かにそのユニークさといったら！

学歴は小学校のみ、丁稚に始まり、その後は商いの道70余年……自らの脚で歩きながら、さまざまな思いを巡らせて醸成された個性なのであった。

（2018年9月11日号）

人材・人財、 そして神在



いつの間にか、神在月も終わった。縁結びの協議はいかなる案配だったろうか、と思う間もなく師走である。振り返ってみれば、イギリスのEU離脱、世界中を驚かせたドナルド・トランプの合衆国大統領当選、わが国では豊洲市場の地下空間と、年々「想定外」のことが当たり前になってきた。

そんななか、聞きたびにやり切れず、哀しみを覚えるのは、過労死のニュースである。電通の女性新入社員の内死は、記憶に新しい。

その企業がもし、彼女の責任感、使命感を盾に取って、その人間を酷使したのなら、社員を人ではなく、手としか考えていなかったとみなさざるをえない。

一般に経営は、人、モノ、金で成り立つ。戦後の日本経済は、金とモノを上方両サイドに、人をそれらの下の一点に置き、その逆三角形を限りなく大きくすることで拡大膨張してきた。

そして今、経営トップの哲学と器量によってもちろん違いはあるだろうが、アメリカ型資本主義をエスカレートさせ、残業をも社員個人の「自己責任」に課すまでに至った。人手

を切るばかりか、命までも断たせる結果を招いた要因は、大地を突き刺す刃のごとき、この逆三角形の構造にあるのではないか。

昔の船場では、人を育てることに懸命だった。それも手塩にかけて、朝となく夜となく「人財」をつくるために努めた。通常、材木の「材」と綴るが、それを「財」に変えることによって、のれんを守ることにつなげたのである。これはおそらく、現在も、数多くの中小企業で日々行われていることだろう。

中小企業においては、あくまでも人が主体でなければならぬ。人がモノをつくり、人の信用が金をつくるからだ。モノと金を底辺に、人その上に座らせ、会社の安定と人のささやかな幸せを図る。ここには、「人が本」という意味での人本主義がある。

「人は居によって育ち、居は人によつて整う」という言葉があるが、まさしく中小企業と社員との関係を示唆して余すところがない。

以前、大学で講演をする機会があった。将来を計りかねている学生を前に、私は、いたずらに大企業を目指すべきではないとアドバイスを

した。

若者にとつて、大企業は確かに魅力的に映るのかもしれない。しかし、そこでは、組織の中に組み込まれ、部分品として一生を終わるリスクがある。

一方、中小企業では、社長の顔が見える環境で、様々な経験を通して社員として鍛えられ、自らの力で企業を動かす存在となる可能性が高い。いきおい、とつさの判断もしばしば試されるだろう。何が起きてもおかしくないこれからの時代、もつとも大切な危機管理能力を身につけることもできよう。

「想定外」のことが当たり前の時代にあって、一人一人の社員の顔を見てくれるトップのもとであれば、少なくとも社員は食事をし、ぐっすり眠る、という当たり前の、人間的な生活を決して奪われることはないだろう。

日本古来の伝統によれば、神々は人の祖先であるという。われわれは皆、神々の子孫なのである。神在月が過ぎても、毎日出会う人の中に神があり、そして、社員の中に神がある。

(2016年12月13日号)

おいしいーい！



近頃のテレビ、どのチャンネルにも変えてもこれすべて料理番組という異常さだ。たかが食いものに、これほどうつゝをぬかしている国が他にあるだろうか。

スタジオに居並ぶ面々が、自称名人の思いつき料理に嘆声をあげる。

「おいしいーい！」

オクターブを上げて叫ぶ声はみな同じだ。

言葉の貧しさはともかく、本当にうまいと感じた時は、むしろ言葉にならぬものだ。少年の頃愛読した、

立川文庫に

「ウーム」

という絶句の表現があったが、却って声にならぬ呻きの方に説得力があると思うのだが……。

私には、もう一つ気になる表現がある。

高名な評論家にも珍しくなくなった「……を食する」という表現である。

食べるという素直な言葉を、わざわざ漢語読みにする、綺麗な器に盛りられたせつかくのご馳走も、これでは艶消しである。

私が結婚して間もない頃だからもう半世紀もまえのこと、ある日家内が、一日がかりでプリンを作った。

今でこそ珍しくはないが、当時手づくりのプリンはそれなりに珍しかった。切子の容れものにおさまった

プリンは、一流ホテルのそれに負けない出来栄である。

しかしどうせ家内、つまり素人のつくったものだど、たかをくくったのはとんでもないあやまちで、口に運んだ一匙のプリンは……。

「これ、本当に前さんが？」

家内の顔に一瞬不安そうな影が寄切る。

「どうかなってる？」

それは今まで口にしたどのプリンよりもうまかった。

肌理のこまかさ、さわやかさ、ほ

どよく抑えたその甘さ……。辛党の私ですら唸るほどの絶品である。

私にホメられた家内、その後幾度となく作ってくれた。しかし不思議なほど、初回のプリンを再現することにはついに叶わなかった。

一度出来たものが二度つくれない。その答えは外でもない。家内はプロではないからである。

どの世界でも論議的だが、私の解釈は、プロとアマの決定的な違いは、一定の味をコンスタントに出せるか否かにある。

安定と継続、残念だがアマには二つとも期しがたいのである。

よくもまあと呆れるほどプリン作りに挑戦した家内も、昨年暮れにあの世に去ったが、あの世でも、あかずに作り続けているのだろうか、冥土のプリン、たべてみたい気がする。

(2015年3月10日号)

はれて卒業

出雲は八岐大蛇、その八塩折の酒を例にひくまでもない、古来、酒の王国であった。楽しいといつては飲み、悲しいと称しては呑む。

大神の めぐみ うれしき

さかづきを

こぼるゝ酒は 手にうけてのむ

実父木幡吹月は、益荒男ぶりにかく謡い、自ら作陶した大徳利に釘でこの讃歌を刻み付け、愛用した。

父が入りの衆と酒を酌み交わす折、私はよく爛付けを手伝った。なぜ大人はあれほど美味そうに飲むの



だろうと、時にお零れを舐めたり：以来、ずいぶんたくさん酒を嗜んできたものだ。

そんな私が養子に遣られた相手先が、ただひたすら商売一途、どだい趣味は罪悪という家風、しかも下戸の家系であったとは。

頭領である義祖父、和田哲夫は、私を一人前の跡取りにすべく大改造にとりかかった。その教えのひとつが「酒を飲まずに阿呆になれ」。

実は、先天的に下戸の彼が編み出した窮余の接客術とは知れていたが、かといって逆らうわけにもいかない。上戸にとつては何とも情けなく、恨めしく思ったこと、一度や二度ではない。

「酒は酒毒」と、文字通り耳に聒眠ができるほど嘔やかれながら、完全に洗脳されなかったのは、私自身の、これも一筋縄ではいかぬ、氏育ちか。煙草は長女の誕生を機にきっぱり止めて60年、一方、酒の方は長く健在であった。

しかし、此方ども、そろそろ縁を切る時期が訪れた。実は、2月末からわずかに2週間の間に、インフルエンザ、偽痛風、血圧の急激な上昇、

そして多発性微小視床出血に、次々と襲われたのである。

特に辛かったのは偽痛風の痛み。

右足が腫れ上がり、1週間以上も悲鳴を上げていたのでは、血圧も下がらない。聞けば、酒は炎症を増強させるらしい。そういうわけで、酒は百薬の長の印籠も、私の場合は有効期限切れ、医者から、今後は少量の飲酒も慎むべし、と告げられた。つまり、年貢の納め時。

とはいえ、左党にとつて、禁酒は困難の道である。たとえば童話作家の小川未明は、「このたび、医者のすすめにより、禁酒いたしました。ついに李白たるあたわず」と哀愁たつぷり、方々に宣言しながら、見事に失敗している。同様の例は枚挙に遑がない。

そこで、私は心が折れぬよう、次の句を口ずさむ。

酒止めようか どの本能と遊ぼうか

大病を患った金子兜太が、医者から断酒を勧められて詠んだ。彼はこうして、70代で酒を止めた。

ついでながら、それから数年後に詠まれた次の句も、今の私には実に

味わい深く、心に沁みる。

長生きの 臍のなかの 眼玉かな

自らの老いを、春霞のおぼろげな情景と重ね合わせながら、それでもまだ、わが眼でしっかりと人生を見尽くしてやろう、という静かな意志が滲み出る。

この強靱でしなやかな魂をもった俳人、折しもこの2月末、98歳の天寿を全うした。

わが父は、亡くなる83歳までよく飲んだ。そして息子の私は、すでにその年齢を超えて、飲み続けてきたのである。おそらく父に、「酒道もそろそろゴールだ。美酒はまたいつか一緒に、な」と、肩を叩かれていたのかもしれない。父の傍で、義祖父の笑う姿も見えるようだ。

縁あって島根に回帰し、多くの人たちに支えられて穏やかに過ごす今日、ありがたく、酒はこのたび腫れて、いや、晴れて卒業だ。

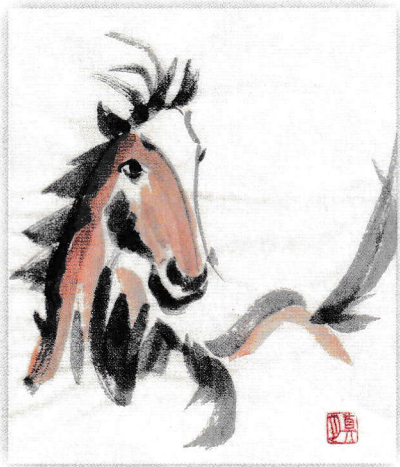
卒業はすなわち、新たな世界への旅立ち。これからは、まだ発見できていない故郷の魅力を存分に見いだし、全身で味わっていきたい。

(2018年4月10日号)

瓢箪から駒

7月末開催の福島県の相馬野馬追、テレビ中継を通して、東日本大震災に屈することなく、千年以上の伝統を絶やさぬ人々の情熱と信仰心、そして人と共に祭りを盛り上げた馬の深刺とした姿に大いに元気をもらう。馬のほとんどが、かつてJRAや地方競馬で活躍し、この祭りで第二の人生を花開かせているとも聞いて、なお嬉しかった。

私は生来、勝負事や賭け事にはさっぱり興味がなく、競馬を見るのは嫌いではないが、馬券は買わない。ただ、馬そのものは子どもの頃から大好きで、絵といえは馬ばかりを描き、長じては騎兵になるのだと決め



ていたものだ。もつとも、中学2年の時に終戦、颯爽たる騎兵の夢ははかなく消えてしまった。

馬好きになったのは、小さい頃、家に馬がいたせいである。農耕馬ではなく、姫路の騎兵連隊から帰った父が乗用馬として飼った、多分アラブ系の馬ではなかったか。4、5歳の頃のことだから、はっきりとした記憶はない。ただ時折、父の鞍の前に乗せてもらって、田舎の町中を得意そうにトロットしたこと、そんな断片的な記憶が馬好きにさせ、第2次世界大戦ではすでに骨董化したいた騎兵に憧れを抱かせたのだと思う。

支那事変が熾烈になり、乗用馬など飼う余裕もなくなると、馬小屋の住人はいつしか牛に入れ替わってしまったが、当時はよく陸軍が宍道に野外演習にやって来たもので、わが家はヒゲを蓄えた部隊長の宿舎にあてられた。

そんな時は、いつも小学校からすっ飛んで帰り、まっすぐ馬のところに駆けつける。多い時は3、4頭が裏庭に繋がれており、馬糧を囓んだり、身体を拭いてもらったりする馬の様子を、カバンを背負ったまま、時を忘れて眺め入ったものであった。

騎兵の夢破れた後は、北海道で牧

場を経営するか、それがダメなら獣医にでも、と思ったりしたが、牧場には金が要るし、獣医になるには入學試験科目に大嫌いな数学があると知り、二つとも叶わぬ望みと諦めた。思えば他愛のない話である。しかし、少年は真剣そのもの、父に買ってもらった「愛馬読本」という単行本、たしか著者は小津茂郎ではなかったかと思うが、表紙が擦り切れるほどに読んだ。

そこには、多数の美しい馬の写真と一緒に、馬の歴史や種類、乗り方までが分かりやすく解説されていた。サラブレッドやアラブ、サラブレッドとアラブの交雑種であるアングロアラブ、またアングロノルマン、さらにハクニーなどという世界の馬種を知ったのも、その本による。中にペルシユロンという、フランス原産の重挽馬の写真があった。普通の馬の倍もあろうかという巨軀、丸太のような四肢に、房状の長毛が密生している異様に驚いたものであった。

それが昭和30年頃、東レ九鱗会(東レ・アローズの前身)の一員としてバレーボール全日本実業団選手権大会で初めて渡道した際、小樽の町で行き合った大きな荷馬車を引く馬、それこそがペルシユロンと知った瞬間の、驚きと感激はなかった。それ、

実は明治初期すでに、フランスやアメリカから馬匹改良種として日本に輸入されていたらしい。ペルシユロンの血を継ぐ馬は、今もばんえい競馬で1、2近い鉄そりを引き、坂道を駆け上る雄姿を見せる。

ところで、十二支の動物のなかで、もつとも多くの諺に登場するのが馬。突然ではあるが、大好きなこの動物にこそ寄せて、「ご隠居天国」に一区切りをつけたい。

2014年の春、すでに「馬齢を重ねた」私に「無事之名馬」と連載のお話を下さった。「乗りかかった馬」と「駕馬に鞭打」つてきたが、月1回の連載とはいえ5年余を経て、時に齢に伴う体調という「高荷をつけたる馬の、岸の細道伝う如し」と相成った。そこで、しばらくは文字通り隠居に徹し、故郷に抱かれてゆつたり日々送ろうと思う。

駒並めて

いざ見にゆかむ

ふるさとは 云々

むろん「瓢箪から駒」、またの見参もあるやもしれないが、それまではごきげんよろしく。

長々雑文をお読みいただき、誠にありがとうございました。

(2019年8月6日号)

